

し で あ そ ぼ !

井上 陽童

1. 本実践の主張

2年3組は、個性あふれるクラスである。そして、大変元気である。子どもたちはこの1年間で、お互いの人柄を理解し認め合いながら成長してきた。学び合いを通して、共同体としての姿も見えてきた。今、子どもたちは2年3組という空間で、自分の居場所をもち安心して生活を送っている。クラスとしての土台はできた。担任としては、うれしい限りである。しかし、その一方で最近課題も見えてきた。それは、自分の考えを伝えたい相手の第一が、「教師」であることがまだまだ多いという点だ。もちろん、担任である私自身が最上の聞き手として、子どもたちの話を受容してきた結果とも言える。しかし、子どもたちの意識の中で、「先生が聞いてくれば、それで満足。」となっている部分があるのだとしたら、そこからさらに一歩進んでほしい。そこで、子どもたちに求める姿としては、例えば話し手には、「クラスの仲間、僕の考えを伝えたい!」という風に、自分を語ってほしい。また、聞き手には、「あの子なら、どんなことを考えるかな。」「あの子だから、こう考えるのかな。」という風に、相手の背景を考えながら聞いてほしい。

そのような『学び続ける共同体』になるための学習材として、今回は「詩」に取り組む。子どもたちは詩が好きである。それはなぜか。うれしいからである。(※ここでの「たのしい」は、たのしむことでその子が変容することも期待して、「愉」の字を使いたい。) 具体的にその愉しさをいくつか挙げてみよう。①音読・朗読「声に出す愉しさ」。②創作「書く愉しさ」。③解釈・批評「読む愉しさ」。つまり、個人としての詩の愉しみ方はいくつもあ

り、その自由さが子どもが詩を好きな理由であろう。本実践では、そういったもともと個が楽しむものである「詩」を、クラスみんなでも愉しんでいく。つまり、クラスの友達を理解し他者意識が育ってきた今だからこそ、仲間の〇〇君が行った詩の音読や解釈を聞いて、その考えに深く共感したり自分の詩に対する価値観が変わったりできると考えた。そして、自分の詩もみんなに表現したいという思いをもつだろう。さらに、そういった活動を通して、国語的な内容である「ことば」の意味を深く理解することや、響きやリズムの面白さを知ることと併せて学んでいく。

2. なぜこの活動なのか

(1) なぜ、「詩」なのか

- ◎一人一人が、自由に読んだり表現したりして、楽しむことができる。
- ◎詩を通して、自分や仲間のことを深く知ることができる。
- 個人でも集団でも、楽しむことができる。
- 発展性がある。※学級経営案参照
- ことばの力をつけることができる。

(2) 低学年総合におけるこの活動の意味

本校の低学年総合学習の目標は、「子どもの生活を基盤とする具体的な活動や目標を通して、子どもたちが自ら学ぶ意欲・態度・能力を育てる。共に学ぶ仲間と活動や体験を共有し、そこから生まれた問題の解決を目指して、互いに考えを出し合いながら、よりよい人間関係を築く力を育てる。」(本校著「授業改革への道しるべ」より)である。

そして「詩」は、この目標を達成できる学習材であると考え。なぜなら、詩を読む・創るなどの活動を通して、子どもたちの学ぶ意欲・態度・能力は大いに伸びるからである。例えば、学校生活の中で子どもたちの心が揺さぶられるとき、その感動を表現する方法として「詩」は大変適している。それは、詩にルールがなく、自分の思うまま、心の内を表現しよう！となったとき、子どもたち一人一人が「詩人」となれるからではないか。そして、その詩をお互いに読み合ったとき、友達の詩を通してお互いをさらに理解し合えるからではないか。「◇◇君は、玉入れの時こんな事を考えていたのか！」「リレーで練習の時からがんばっていた〇〇さんには、こんな思いがあったんだな。」そのようなつながりは、ある詩を声に出して読み合ったときにも生まれる。「□□君のような読みがあったのか！」「◆◆さんの声の響きがすてきだな。」このように、詩は子どもたちが自分を表現し、お互いを深く理解し合い、さらには、クラスが共同体として成長するための“道具”となる力を持っていると考える。

(3) この活動のねらいと育てたい力

本実践では、詩を創作したり音読したりする活動を通して、自分の思いを表現し、学び合う仲間がどのような思いをもっているのかを聴き、それらを交流しながら自分の考えを広げたり深めたりしていく姿を期待する。また、国語的なねらいとしては、自分の声を吟味しながら、相手に自分の思いを伝えようとする姿。他者の読みに触れ合うことによって、自分の読みを広げたり深めたりする姿。他者の読みを聴き合うことを通して自分の読みが変容することにより、結果として聴くことの大切さを知る姿。日本語のもつ音の響きやリズム感、意味の多様性などを知る姿、などを期待する。

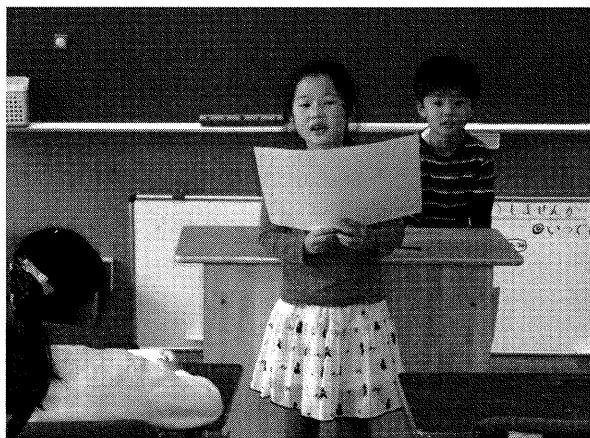
(4) この活動で期待する「学び続ける共同体」としての姿

子どもは遊びの天才である。そして、詩には様々な遊び方（楽しみ方）がある。本実践では、様々

な詩の遊び方を子どもたちと考え取り組んでいく中で、「この詩は、こんな風に遊んでみたい！」「前回の詩とはこういうところが違うから、こう愉しもう！」という風に、子どもたち一人一人が詩と自分なりに向き合い、詩を愉しむようになっていくことを期待している。そして教師は、それぞれの意欲や読みの方向性を感じながら、時に読み方を示し時に子どもたちにゆだねるなどして、子どもたちが自分の意見を伝えたい！友達の意見を聴きたい！と思えるような場を授業の中で設定していく。さらには、2年3組の生活と密着して詩の活動が継続していったとき、最終的には、「詩集作り」や「群読の発表会」などへも発展していくのではないかと考えている。

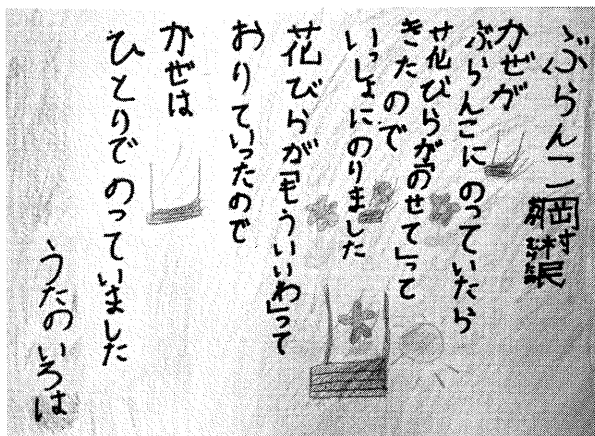
3. 主張にせまる手立て

(1) 朝の会の「日直さんのお気に入りの詩紹介コーナー」



「席替えしたら、次の日直さんのお話は『お気に入りの詩』を紹介することにしませんか？」これは、5月の朝の会「〇〇しませんか？ コーナー」でのこうき君の提案である。詩の単元を構想し始めた授業者にとっては、願ったり叶ったりの展開であった。けれども、決してそのような流れを意図的に作り出したわけではない。子どもたちは、4月から詩集「ひばり」を音読してきた。家庭学習と、言葉の学習の導入で少しずつ積み重ねてきたのだが、5月の初めに、「お気に入りの詩はもう見つかった？」と尋ねてみた。すると、全員が

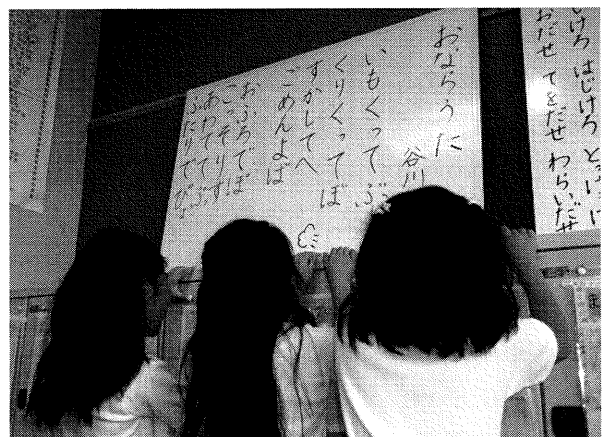
「見つかった！」というのである。その中には、家で繰り返し音読したことで暗唱できる子も数名いた。そこで、造形の時間とつなげて、自分のお気に入りの詩を画用紙1枚に絵とともに表現する活動を行い、教室内にそれらを掲示した。おそらく、こうき君の冒頭の発言は、その掲示物を見て思いついたのだろう。そして6月から、実際に「日直さんのお気に入りの詩紹介」を行っている。まず、日直さんが自分のお気に入りの詩を朗読する。暗唱する子もいるし、造形で創った作品を手を持って朗読する子もいる。そして、朗読が終わったところで感想・質問タイムである。どうしてその詩がお気に入りののか？音読の仕方のここがよかった。自分もその詩が好きである、などなど、聴いていた子どもたちが自由に発言する。そして、日直さんが答える。このような活動を通して、○友達の読み方から、自分の読みを広げる。○友達のことをより深く知る。○詩を好きになる。などの姿が育つと考える。



(2) 学びの連続性を支える教室掲示の工夫

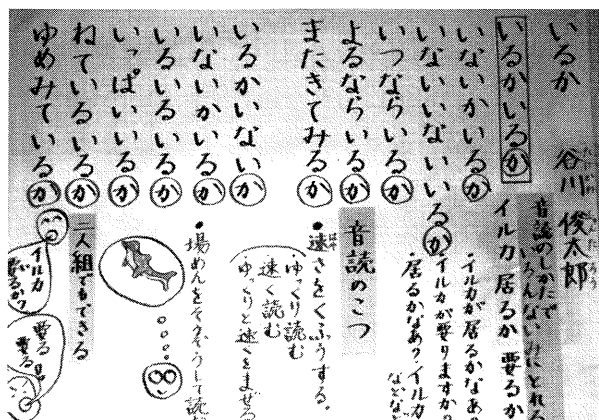
本校の低学年総合学習では、生活と学びが一体化して子どもの中にある。そこで、そのよさを最大限に生かし、詩と子どもたちの生活を結びつけていく。そうすることで、子どもたちの中で、自然に詩が身近なものになり、詩で遊んだり詩を通して友達とつながったりするようになると思った。

(3) 様々な詩と出会わせる「詩ボード」の工夫



詩には、様々なものがある。声には出さず、じっくりと1人で読み味わいたくなる詩。何人かで声をそろえて読みたくなる詩。自分の生活経験と重ねて、思わずニヤッと笑ってしまう詩。なんだか意味はよく分からないけれど、気になる詩、などなど。そのような様々な種類の詩と子どもたちが自然に出会える場として、教室内にホワイトボードを置きそこに担任が選んだ詩を約1週間ごとに提示していく。最近では、朝一番に新しい詩を見つけて「あ！詩が新しいのに変わった！」と声を上げる子や、「先生、次の新しい詩はな～に？」と尋ねてくる子など、子どもたちの中でもこの「詩ボード」を楽しみにしてくれる姿が出てきた。さらに、朝の自由時間や放課後の時間に、友達3人ほどで声をそろえて音読する姿（※右写真）も出てきた。今後は、子どもたちが持ち込んできた詩も、紹介する予定でいる。

(4) 詩の遊び方・楽しみ方を残す掲示物の工夫



本時までには、子どもたちには大きく分けて3種類の詩を提示する。それは、①作品『いるか』～意味の二重性が含まれたもの。②作品『トマト』～回文などの言葉の面白さや、創作する楽しさが含まれたもの。③作品『とっさつき』～クラスの仲間と声をそろえ間を意識しながら群読する面白さが含まれたもの。そして、これらの詩を毎時間一遍ずつ学んでいくことで、子どもたちには詩に対する学び方（遊び方）が増えていくことになる。その方法を掲示物として残すことで、本時の詩「そっとうた」をどのように学んでいくか、子どもたちが考える手立てとなるだろう。

(5) 児童の実態および期待する他者意識

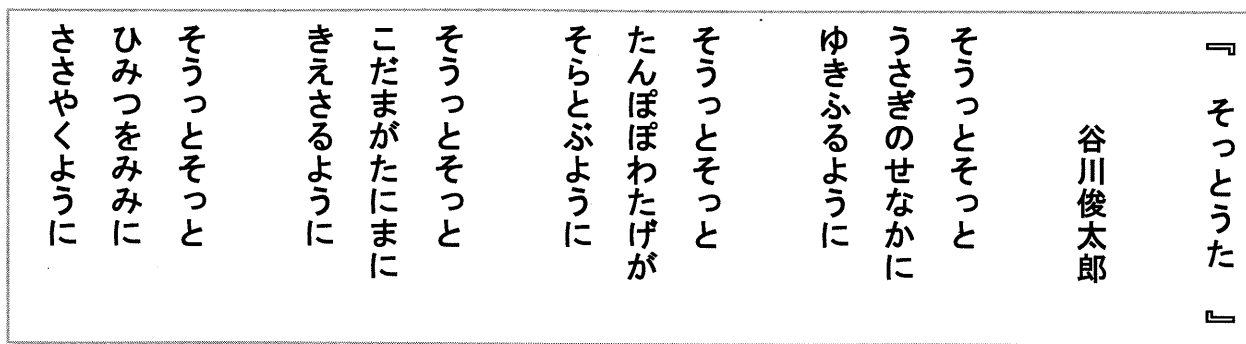
最近の子どもたちの言葉から。「まだ、〇〇さんが話しているよ。」「最後まで聞こうよ!」「聞こえないので、もう1回言ってください。」以上の言葉から、聞き手としての姿は徐々に育ってきていると感じている。もちろん個人差があり、本当に相手の話を聴きたくてそうしている子もいるし、まだまだ型としてそうしている子もいる。しかし、

総じて仲間話を聞き、仲間を尊重する姿は見られる。また、話し手に関して言えば、一人が発言をする時周りがざわついていれば、「お話してもいいですか?」と必ず呼びかけてから話し出すようになった。周りがざわついていてもお構いなしに話すような子は、一人もいなくなったのである。これは、「自分の話をきちんと聞いてほしい!」「仲間に自分の考えを伝えたい!」という思いの表れであろう。しかし、本指導案の冒頭でも述べたが、伝えたい相手の第一が「教師」であることがまだまだ多いのも事実である。そこで、そんな子どもたちの現状を踏まえた上で、さらに子どもたちの他者意識を高めたい。具体的には、子どもたちに1年生の時から伝えてきた「仲間の意見には、自分の考えのヒントになるものが必ずある」という意識を子どもたちの中に育てていきたい。詩という材を通して、様々な友達と読みや表現を交流することで、そのような意識が育っていく事を期待している。

4. 展開計画（次頁）

5. 本時で扱う詩「そっとうた」について

この詩は、これまでの3つの詩と印象が明らかに違う。それには子どもたちも一見して、あるいは、声に出して読んでみればすぐに気づくはずである。では、何が違うのか? おそらく一番の違いは、これまでの3編が声に出して楽しい童歌・言葉遊び歌だったとすれば、この「そっとうた」は、大人が読んでも考えさせられるような解釈を愉しむことに重点が置かれた詩、ということであろう。では、本時で子どもたちにこの詩から何を学んで



ほしいかといえば、3つある。

まず一つ目は、自分の中の『そうっとそっと』の世界を探し出してほしい。2年3組の子どもたちは

本当に元気いっぱいである。毎日精力的に活動している。しかし最近、彼らの日常があまりにもガサガサと忙しく騒がしく過ぎているように感じるのでは

展開計画

経験を広げる活動	仲間とともに作る活動	個の興味を追究する活動
<p>詩集「ひばり」を読もう。</p>	<p>予想～・給食を運んでいる。・校長先生がたべるはず。</p>	<p>あのね帳で、詩を創ってみよう！</p>
<p>朝の会の日直さんの発表を、「お気に入りの詩の紹介」にしませんか？」</p>		
<p>「詩ボード」登場！</p>	<p>①「いるか」～意味の二重性を愉しむ詩</p>	
<p>「運動会」をテーマに、詩を創ろう！</p>	<p>②「トマト」～言葉の面白さや創作する楽しさがある詩</p>	<p>・詩集を借りてみよう！</p>
<p>「小さな遠足」をテーマに、詩を創ろう！</p>	<p>①「とっきっき」～クラスの仲間と声をそろえて読む楽しさがある詩</p>	<p>・詩を創ろう。 ・個人研究</p>
<p>☆本時④「そっとうた」～自分や友達もっている「そうっとそっと」の世界を、音読や語りを通して共有する楽しさがある詩</p>		
<p>「実習生の先生」をテーマに、詩を創ろう！</p>	<p>〇〇さんが好きな詩を、みんなで読もう！</p>	
<p>百人一首「昔の人の詩を覚えよう！」</p>		
<p>クラスの歌を創ろう！</p>		
<p>みんなの広場で、予告をしよう！ メディアルームに詩集を置きたい</p>	<p>群読発表会をしよう！</p>	<p>物語を創ろう！</p>
<p>2年3組詩集を創ろう！</p>		

る。そこでこの詩に出会わせる。この「そつとうた」は、どれも時間がゆっくり過ぎる中での様子、あるいは、状態が描かれている。それを読んだとき、子どもたちが自分の中でそうしたゆっくりと時間が流れる経験や、誰かのために「そつとそつと」行動した経験を思い起こすきっかけになってほしい。

二つ目は、一つ目で述べた一人ひとりの「そつとそつと」の世界を語り合い聴き合う中で、お互いのことをさらに深く分かり合ってほしい。これは、1年間を共に過ごしお互いのことがある程度分かって何でも安心して言い合える今だからこそ、できることだと考える。

三つ目は、これまでの3つの詩を遊んだ経験を活かして、今回この「そつとうた」を解釈する活動から、自分たちで活動を発展させてほしい。それは、子どもの言葉で言え換えれば「この詩で〇〇をやりたい!」ということになるだろう。その姿が見えたとき、詩と関わることを通して、子どもたちが学び続ける共同体として成長していることの証になると考える。

6. 実践のふりかえり

(1) 「そつとうた」について

協議会で話題になった「この詩が、2年生には難しいのではないか。」という指摘には、やはり同意できない。あれだけの想像ができ交流ができることから考えても、よい学習材だったと考えている。また、4つの連を「世界」としたことで、そのどれが好きか、という風に切り離して考えたことも、効果的な手立てだったと考えている。なぜなら、4つの世界のどれが好きか、と問うたことで、子どもたちは自分に引き寄せてより深く考えていたからである。これが、初めから4連全部をひっくり返してこの詩について考えさせていたら、そうはならなかったはずである。指導案の5にも書いたが、そもそも、この詩のテーマが「温かさ」や「優しさ」だったとしても、本時では、そのテーマを全員に読み取らせることを目的としていない。そうやって、教師が読み取った詩の価値を子どもたちに見つけさせたり気づかせたりすることこそ、

本単元では避けたいと考えていた。そうではなく、本時の一番の目的は、子どもたちの中の「そつとそつと」の世界を探し出すきっかけになってほしい、ということだった。したがって、自分に引き寄せて「そつとそつと」を味わった結果として、この詩のもつ「温かさ」や「優しさ」に気づく子がいれば、なおよいと思っていた。以下に子どもたちのノートの読み取りをいくつか載せておく。

ななみ) ①が好きです。理由は3つあって、1つ目はうさぎが好きだからです。2つ目は、うさぎに雪が降って寒そうなのがさりげなくてかわいいからです。3つ目は、雪が空一面に地面一面に広がっていて、その中に白うさぎがピョンピョンはねているのがかわいいからです。

いろは) ②が好き。理由は、タンポポがフワフワでベットや空も飛んだりできるし、静かだから。私はタンポポが好き。優しい気持ちになる。

ともや) ③は、こだまが谷間にそつと消え去っていくところが想像できるから好き。

けいじ) ④の秘密を教えてくれるのは、すごいことだから好き。あと、交流してみて「そつとうた」が前よりすごく好きになった。

(2) 教師の絵の提示と第5連の創作から見える課題

今回の授業で、大きく2つの失敗をしたわけだが、そこをつきつめると、私自身の課題が浮き彫りになってきた。それは、子どもたちの学びを保証したいと思いつつも、一方で、その過程にゆさぶりをかけ、さらに新たな展開を生み出したいと私自身が潜在的に常に思っている、ということである。しかし、授業記録をていねいに振り返ると「ゆさぶり」、言い換えれば、「教師の出」が今回あまり必要なかったことは明白である。子どもたちは自分の力で十分に学ぶことができていた。そして、お互いに意見を交わすことで認め合い、時にゆさぶりをかけ合い、詩を愉しもうとしてい

たのである。その中であって、教師の出は「ゆさぶり」ではなく、明らかに「邪魔」になっていた。例えば、教師の絵を出したときは、一瞬「先生、上手！」という反応はあったが、ななみさん「絵はうまいけれど、イメージ下手くそ。」というように、絵が子どもたちの学びを支えたり促進したりする手立てに全くなっていなかった。また、ちょうど授業時間の45分間が過ぎた14時36分からの「自分だけのそうっとそとがある人はいる？」という発問には、かもんくんたち一部の子が反応した（付き合ってくれた？）だけで、かなりの子の気持ちが一気に授業から離れてしまったことがうかがえた。これらの事実から、5年ユニットの模造紙では、「Tの思いに、子どもたちへの信頼感をプラスしたい」という指摘をいただいた。

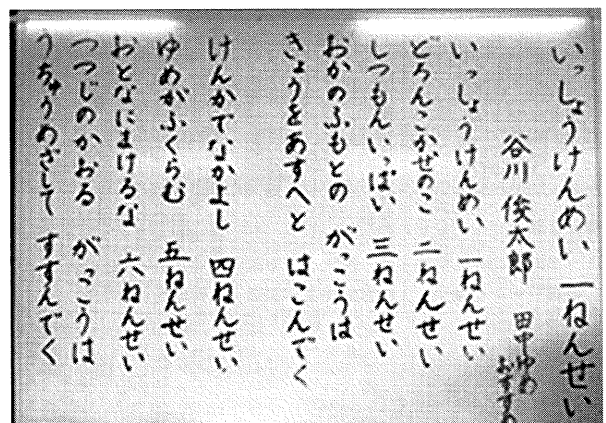
そこで、考えたこと。それは、「子どもを信じて、もっとゆだねる授業展開・授業作り」を今後さらに目指していくことである。本時であれば、「そととうた」を個々が愉しむために、絵を描いても声に出しても書き込みをしても友達と読み合っても自由とする。そして、全体交流の場では、子どもの意見のつなぎ役や聞き役に徹する、などが考えられる。もちろん、教師の出が必要なきはあり、それをすることは今後ためらわないだろう。けれども、単元を進めていく中で、子どもたちが徐々に変容していったとき、その姿をていねいに見つめ、それにあわせて徐々に教師の出を少なくしていく必要があるだろう。要は、「学び続ける共同体」を育てていくためには、「教師の出」と「児童にゆだねること」のバランスが大切なのである。これをたこ揚げにたとえて言うならば、「初めはぐいぐい引っ張る。そして、ひとたびたこが空に浮かんでからは風を時々送ったり、糸を少し引っ張ったりするだけでいい。ただし！糸はゆるめない。」ということだろう。

(3) 事後に見る「学び続ける共同体」としての姿

いるか・トマト・とっきっき・そととうた、と子どもたちは、大きく4つの詩に出会い、詩を愉しむ経験を積み、その経験を活かしてさらに自分

なりに愉しむ姿が出てきた。今後もその姿を期待し支えていきたい。その時の教師の役割としては、例えば、すてきな愉しみ方をしている子を紹介し、クラスみんなでも〇〇さんの愉しみ方でやってみよう呼びかける。自由に交流する時間を保証して、友達のよいと思った愉しみ方を自分もやってみよう勧める、などがあるだろう。

また、1学期後半に見えた「学び続ける姿」として、「先生、今度はこの詩を『詩であそぼ!』でやってみたい。」と家にあった詩集から選んで持ってくるゆめさんやひとみさんの姿があった。そこで、早速教室の詩ボードで紹介した上で、「そととうた」の後に、ゆめさんの「いっしょうけんめいーねんせい」にクラスみんなで取り組んだ。さらに、その「いっしょうけんめいーねんせい」では、「みんなで音読したものを、録音したい!」という子どもたちの希望にそって録音をし、それをみんなで聴き合う展開になった。すると、ある子から、「これからやる詩はどんどん録音して、CDを作りたい!」という話も出てきた。2学期始めには、ひとみさんの詩を扱う予定である。以上のように、教師の期待していた姿や期待を越える姿が次々に現れてきている。今後も1年間を通じて、「しとあそぶ」2年3組の姿を支え見守っていきたい。



引用・参考文献

- 谷川俊太郎他 著 (1988)「子どもが生きる ことばが生きる 詩の授業」国土社
高橋俊三 著 (1990)「群読の授業」明治図書出版

<p>■学校教育目標■ 思い豊かに 考え深く ともに生きる子</p> <p>■研究主題■ 学び続ける共同体としての学校の創造</p> <p>■学年部目標のテーマ■ 願いと求めに応じた自己の出て →素直な子ども</p> <p>■担任が願う子どもの姿■ ◎こだわりのある子 ※継続 自分の特技・趣味を大切にし、周りに発信できる子になってほしい。「これをやらせたら、あいつはピカイチ！」そう仲間が認識することで、個が輝きクラスがより豊かで楽しいものになるだろう。</p> <p>◎聴き合える子 ※継続 「友達の見解には、自分の活動のヒントになるものが必ずある。」昨年度、このことをくり返し子どもたちに伝えてきた。実際、それを実感した子は、聴き合えるようになってきた。そうやって、クラス全員が自分の思いも友達の見解も大切にできる集団になったとき、2年3組は「学び続ける共同体」にさらに近づいていくだろう。</p> <p>◎自律した子 クラスは、自分の願い・思いを実現する場である。そして、子どもたちは個々に「自分の夢を実現するための権利」言い換えれば『自由』をもっている。しかし、その『自由』は、自分の責任を自覚して行動しなければ、得られない。自分を律しながら行動できるからこそ、夢を実現できる力も育つと考える。『自律性と共存性』</p> <p>■児童の実態■ 〈生活面〉 昨年度から変わらず(昨年度に増して?)、元気一杯の子どもたちである。自分の身の回りのことも、全員がある程度しっかりできるようになってきた。また、みんなで協力して行う給食の準備や片付け、掃除、係活動などの意欲も高い。一方で、時間を守る意識や廊下歩行など、自分たちで生活を作る意識が緩んできている面が見られる。1年生のお手本となること、有意義な時間の使い方などを常に考えさせていきたい。</p> <p>〈学習面〉 ・「あのね帳」を中心に、書く活動を継続して行ってきたおかげで、力を伸ばしている。 ・しっかりと「話を聞く」ことを昨年度を通して大切にできた。「担任の話だから」「担任がいるから」話を聞く、という姿勢から、少しずつ「誰の話でも」「どんな状況でも」聞ける子が増えてきた。けれども、まだ個人差が大きい。今年度も、クラスで学びを創っていく中で、「○○さんの意見のおかげで、分かったよ。」「◇◇さんの言っていたのはこういうことか!」など、仲間の意見に「ゆさぶられる」経験を数多く積ませたい。 6月実践「しであそぼ!」では、友達の詩の音読から、その子の詩のイメージを想像し、共に詩を愉しむ姿が見られた。 ☆連続性・発展性のある学びの創造</p>	<p>●1学期「自分たちの生活・学びを確かめよう」 昨年度創り上げてきた生活や学びを確かめ、より充実させていく。子どもたち一人一人には、おそらく昨年度の1年3組を自分たちの手で創り上げてきた、という自負や喜びがあるはずである。そこで、その気持ちを大切にしながら、4月からスムーズなスタートを切りたい。また、お相手さん活動では、必然的にこれまでの経験を振り返る場面が生まれるだろう。昨年度のお相手さん(現3年生)への感謝の気持ちを大切にしながら、1年生の学校生活を支え導く中で、2年生としての責任感をもたせたい。</p>	<p>●2学期「自分たちの生活・学びを発展させよう」 低学年における一番の充実期である。個の学びとクラスの学びの両輪を関連させながら充実させていきたい。そのために、1年生から行ってきた「個の気づきや興味関心」→「クラス全体の学習問題」の流れだけでなく、「クラス全体の学び」→「個の追究」の流れも、積極的に奨励していきたい。 お相手さん活動も各ペアの距離が縮まり、1年生の願いも積極的に活かしながら、より充実した活動を創っていききたい。</p>	<p>●3学期「最高の2年3組にしよう」 二年間の総まとめの時期である。「この仲間を過ごす時間を大切にしたい!」という子どもたちの思いを活かしながら、その生活や学びを支えていきたい。また、クラスの活動でこれまで行ってきた「計画」→「準備」→「実行」→「振り返り」→「修正」のサイクルを大切にさせながら、子どもが「自分たちの力でやり遂げた!」と思えるような活動を実現させたい。</p>																								
<p>期待する他者意識</p> <p>具体的な手立て</p>	<p>■相手の話を共感的に聞くこととする姿■ 「共感的に聞く」ことを大切にさせたい。「興味をもって聞く」と言いかえてもよい。この姿が現れることによって、「○○さんの考えに、付け足して」「反対に」「もっと分かりやすく言う」となどのように、子どもたち同士で発言をつなげ合い、考えを深め合う姿に発展していくと考える。また、共感的に聞く雰囲気生まれれば、自分の思いを発信したいという子も増えるだろう。</p> <p>①幼稚園・保育園の先生からの手紙発表 昨年度の終わりに行った「お届けします!私の成長」単元で送った手紙の返信がクラス全員分!届いた。その日に1日2通ずつその内容を紹介してもらおう。おそらく新2年生の門出を応援する内容であり、子どもたちは思いを新たに1日をスタートさせるだろう。</p> <p>②寄り添い導いていくお相手さん活動 まずは、お相手さんである1年生の気持ちにより添わなければ、1年生の生活をいねいに教え導くことは難しいだろう。そのため、相手の話をいねいに聴くことを大切にさせたい。</p>	<p>■自分の思いを“分かりやすく”伝えようとする姿■ 自律した個が育っていく中で、仲間に対する声かけも増えていくはずである。依頼・提案・要求・相談・報告・賞賛など、その時々での仲間への伝え方を考えさせていきたい。また、その伝える力を育てる日常的な取り組みを継続して行っていきたい。</p> <p>③詩の音読・朗読 年間を通して、朝の会で継続して行っていく。伝える力を育てる取り組みとしてだけでなく、群読や劇化など、表現活動へと進化・発展していくことも期待している。</p> <p>④自分の考えを形成するための書く活動の充実 「あのね帳」や「お相手さん活動記録」「各活動の学習感想」など、「書くこと」を通して、自分の活動を振り返ったり、次の活動を構想したりしていく。また担任は、毎日それぞれの書いたものを読み、個々の考えに触れることで、クラスの一人一人を理解し、学びを支えるヒントも得ることができるだろう。</p>	<p>■仲間の考えを生かして自分の活動を創っていかうとする姿■ クラスの中で、お互いが影響し合って学びを創っていることをはっきり自覚している時期である。これまでも伝えてきた「友達の見解には、自分の活動のヒントになるものが必ずある。」という意識をさらに大切にしながら、子どもと共に日々の学びを創っていききたい。</p> <p>⑤連続性・発展性のある学びを創る 2学期後半から3学期にかけて、二年間の総まとめとなるような活動が展開されるはずである。この中で、自分の考えが賛成されたり反対されたりしながら、最終的にクラス全員の仲間の意見が生かされるような経験を多く積ませたい。もちろん、担任がその学びをコーディネートしていくわけだが、子どもたちの実感として、「自分の意見が活かされた!」「自分達でこの活動を創ったんだ!」という感触が得られるように、支えていきたい。</p>																								
<p>学級カリキュラムの展開</p> <p>自分の興味を 発展させる活動</p> <p>仲間とつくる活動</p> <p>経験を広げる活動</p>	<table border="1"> <tr> <td>4</td> <td>5</td> <td>6</td> <td>7</td> <td>8</td> <td>9</td> <td>10</td> <td>11</td> <td>12</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> <td>読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉</td> </tr> </table> <p>お気に入りの詩・物語 調べて書こう「総合ファイル」 読み聞かせをお互いにしよう! 秋の虫探し 実践生の先生にお礼のお手紙を書こう 実践生の先生を迎える会 お送りする会 おみせやさん 大きな遠足 クラスの歌を創ろう? 群読発表会? 俳句を知る「昔の人の詩を読もう!」 俳句を作ろう お相手さん活動報告 作文を書こう 10000までの数 シュートボール 鉄棒・跳び箱・マット遊び 好きなものいっぱい 運動会の絵 粘土 ぐるぐるお絵かき おしゃれなカラス ひっかきお絵かき クリスマスリース作り</p> <p>2年3組総合 最終単元</p> <p>クリスマス会をしよう お正月あそび 2年3組詩集作り カルタ作り 詩を創ろう 学年文集作り 宝運びゲーム なわとび ボール蹴り</p>			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉
4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3																
読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉	読書 図鑑 色板・ブロック 野菜を育てよう 折り紙・つみき・自由帳・けん玉																

■関連性を高める手だて■ 一低学年総合学習を創る視点一

○個の思いをみんなで共有する場としての「朝の会」の充実～「お話しでもいいですか」「○○しませんか」コーナーは子どもたちの中で定着してきた。今後はさらに、「個の気づき・興味関心」→「クラス全体の学習問題」の流れを大切にすることで、子どもにとって切実感のある学習活動が展開できるはずである。そのため、「仲間の話をなぜ聞のか」「仲間の呼びかけをどう受け止めるのか」と常に子どもたちに問い直していきたい。

○連続性・発展性のある学びの充実～「劇化」「学校探検」「給食」「手紙」などの1年生で創った総合単元の経験を活かしていく。また、子どもたちに対して「願い」を形にするための『行動力』『責任感』を求めている。